

IV 体育 2年次の成果と課題

1 成果

(1) 自己の学びをつなげるための3段階の省察の工夫

授業の導入・展開・終末の三つの過程で「自分の課題は何か」「何をすべきか」「何を学び、次に何をすべきか」に分類して省察を位置付けることによって、学習を深めることができたことが成果である。

導入の場面では、毎時間、前時にもった「次の課題」を確認しながら本時の学習課題を結び付けて「めあて」をもつようにした。開脚跳びを成功させるために、「助走からの力強い踏み切りができていますので、今日は上から振り下ろす手の着き方を意識しよう」のように、前時の学びとのつながりを大切にしながら、自分の技能の向上や練習方法の選択など自分に合った「めあて」を立てることができた。

展開の場面では、技能を高める手立てとして、動きのこつを子どもたちの言葉からキーワード化し共有した。ボール運動ではドリルゲームやタスクゲームの中でドリブルで攻めるために「1, 1のリズムで」や「敵が来たら止める」などのこつを意識した。器械運動では技ごとに分かれたコース別学習の中で、「踏み切りは強く、ドン」や「着地は膝を使って、ピタ」などのこつを意識した動きが見られた。子どもたちは、自分の課題を解決するために、何を意識して動き、どんな練習方法や練習の場を選択すればよいかを考えながら活動を進めることができた。

終末の場面では、「すぐに止めてパスをするといいよ」「さすが、ポイントだね」や「そろえて両手をついたら、前へ進むよ」「次は手をつく時に、意識してやってみるね」などの「仲間との対話」から自分の学びへフィードバックすることができた。自分の課題を友達の動きと照らし合わせながら見たり、解決できなかったことを友達とアドバイスし合ったりすることで、子どもたち何を学んだのか次は何をすべきなのかを明確にすることができた。

(2) 「見方・考え方」を知り、主体的に課題を解決できる単元構成の工夫

単元の導入において、高学年のボール運動の領域では試しのゲームを、中学年の器械運動の領域では単元の最初に試しの運動をそれぞれを行ってから子どもたちと共に全体計画を立てた。そのことで、子どもたちは自分が今現在できること、今現在の課題などを把握した上で、単元の見通しをもつことができた。

「見方・考え方」を自覚的に繰り返し用いるために、ボール運動ではドリルゲームやタスクゲームを単元の中に繰り返し位置付けた。課題を意識した学習活動を効果的に取り入れることにより、動きを意識しながら自ら設定した課題を解決する姿が見られた。また、器械運動では技の連続写真に目印や気を付ける点をキーワードにして記入する活動を行ってから技の練習に取り組むなど、自分の課題をつねに意識しながら学習を進め、課題をスモールステップで解決することができた。

ボール運動ではメインゲームの中で見られる動きを繰り返し挑戦できるようにしたことやゲーム性を高めていった。器械運動では基本の技のポイントを反復したり、同じポイントを使って発展技に挑戦したりした。そのことが、ボール操作や体の使い方についての知識及び技能とともに意欲を高めることにつながった。

2 課題 自分の能力に適した課題を解決するための活動や自己やチームの特徴に応じた作戦などを自ら選択・決定していく子どもを育てる指導の在り方

本校の子どもたちは、自分の課題を見付けたり、その解決方法を選択したりすることが概ねできている。しかし、本当に自分の能力やチームの特徴に合った課題であるのか、本当に課題の解決に適した練習の場や作戦であるのか、適切に選択・決定できているとは言えない。そこで、仲間や教師との「対話」を通して、自分の能力に適した課題を解決する練習方法や自己やチームの特徴に応じた作戦を自ら選択したり決定したりすることができるようになりたい。

体育科では、児童の発達段階を考慮するとともに、学習指導に弾力性をもたせることを配慮するため、各学年の目標を低・中・高学年の三段階で示している。このことを踏まえて、1・3・5年生では、教師が提示したり、今までの学習経験や運動経験から子どもたちの「対話」から出されたりした、誰もが楽しく参加できるようなルールの工夫例や自己やチームの特徴に応じた作戦例、課題を解決するための練習の場や段階の例などから自ら選択することができるようにする。2・4・6年生では、前年の学習経験から子どもたち自ら考え、「仲間との対話」で練り上げられた、課題の解決方法や作戦などを決定していく。そのような学習を6年間継続していくことで、仲間や教師との「対話」を大切にしながら、仲間や教師からのフィードバックをもとにして、考えを修正し、自己選択・自己決定することができる単元構成の工夫をしていきたい。